備陽史探訪
第67号
発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL(0849)53-6157

南北朝異聞

一部地頭葉山氏の執念

―朝廷にかけた一五〇年、本領回復の夢―

出内博都

後醍醐天皇の元弘回天の挙兵は、その後に続く数十年の南北朝動乱の起点として、日本歴史の転換点である。特に、船上山における天皇の再挙は、中国路の武士の野望への契機となった。

備後国恵蘇郡湯木村(比婆郡口和町)一部地頭葉山城雅楽助源頼連は、この戦乱をお家再興の好機として、一族をあげて各地に転戦している。

「城頼連申状案」(『毛利家文書』)によると、

(以下史料は現代語に訳して示す。ただし用語については、できるだけ原文に忠実に訳したので、当て字・誤用が多いことをご理解願いたい)

「早く奏聞を経て、兵部卿親王家(護良親王)并に中務親王家(尊良親王)の令旨によって、都鄙度々の合戦に忠節を致しましたので、本領等返し賜れば、いよいよ向後忠勤を抽んでます」

として、副進状四通(両親王家令旨案・殿法印御坊外題案・宣下状案・系図)を副えて願いでている。

この申状には、

「頼連は安芸国葉山次郎頼宗五代の後胤で、去る承久合戦のとき先祖義職が御所方に参り、合戦の忠を致しましたので、世帯悉く関東に没倒され、子孫皆牢籠せしめられ、愁吟のうちに年序を送りました。そうしているうち、二月廿三日(建武元年)御方に馳せ参り、播磨国苔縄城城下(赤松則村の本拠)において令旨を賜り、一身の大慶として苔縄城櫓に参りました。その後高田城に責寄せ、南角(大手)箭倉を破却し、城中に攻入り、不惜身命の攻戦を致しました。その刻、郎等片岡三郎が打死し、五郎太郎平七以下が数ケ所疵を負い、深手の者は後日死亡しました。此条について河北四郎五郎并船引太郎兵衛等が存知ております。軍忠神妙の由が御感に預かり四月晦日(廿九日)雅楽助を拝任いたしました。その後又、自国他国の戦いに参り、令旨によって備後国に馳せ下り、三吉下村(三次市)入君保(君田村)を責随え、群勢を率いて御坐船上山に馳せ参り、御着到の後に付して上洛の企てに参加し、殿法印御坊の手に属し度々忠節を致しましたので、御感令旨に預かりました。五月七日鳥羽造道并六波羅巳下の合戦等に忠を致しましたことについて、筑後左衛門五郎、備中住人難波六郎等が見知っております。これは大将軍(殿の法院)御外題によって明らかです。先祖承久の労功と云い、今度の軍忠と云い、本領返し賜る等勲功の賞に預かれば、向後勇士の面目と致します。恐々言上如件」

とあり、建武五年に申請している。

この申状によれば、葉山頼連は安芸国大族、葉山頼宗の五代の後胤といっている。葉山氏は鎌倉・南北朝期に安芸国内部庄(吉田町)備後国踊喜村(比婆郡口和町)の一部地頭職をもつ一族で、「踊喜」「早山立城」「城」「三戸」「葉山」「源」等様々な苗字を名乗っているが、本姓は「源」である(『広島県史』)。

葉山頼宗については、『吾妻鏡』文治五年(一一八九)十月二十八日の条に

「安芸国大名葉山介宗頼(頼宗)は奥州下向(藤原氏討伐戦)の途中、駿河国藁科河辺りで(中略)帰国してしまった。(中略)ここで処罰しなければ傍輩に示しがつかない、と梶原景時が進言した。そこで、宗頼の所領を没収することが決定された」

とある。

この時の所領は不明であるが、彼が在庁官人の最高職(在庁兄部)として、それに付随した所領・所職を持っており、源平合戦で源氏方について地頭になった経緯からみて、在庁得分(久武名以下の名田)の他に、原郷・内部荘・世熊荒山荘・能美荘並びに佐東郡・安南郡の地頭職等のうち、主要部分を持っていたと思える(『広島県史』中世編)。これは、源平交替の中で現地土豪が外様御家人として編成されたものであろう。しかし、『吾妻鏡』のとおり、関東御家人の西遷政策のなかで、葉山氏は外様御家人の追放政策の犠牲になり、その後、内部荘の一部が返還されたのであろう。

さて、頼宗の没落から三十年、承久の乱に再起をかけたが不調に終わり、それからさらに百十余年、時節

到来と再度立ち上がったのが元弘の乱であった。頼連の申状にみられる「本領返賜」が文治年間の頼宗時代への復活と考えれば、実に百五十年になんなんとする葉山氏の悲願である。それだけに、頼連だけでなく一族の動きも活発であった。

翻って、正応三年（一二九〇）五月三日の「源景頼着到状」（『毛利家文書』）によると、

「備後国泉庄踊喜村地頭尼詣阿子息六郎景頼、依朝原八郎為頼事参上仕候、以此旨有洩御披露候、恐惶謹言」

という書状を奉行所へ提出して、探題北条兼時の証判をもらっている。これは朝原為時が伏見天皇を狙って御所に侵入し、清涼殿で自殺した事件で、たまたま大番役で在京していた時の事である。朝原は武田系小笠原の一族で、剛力であったが、悪事をはたらき追放をうけていた。

この正応三年三月九日夜の御所侵入事件は、両統迭立による皇位継承問題がからんでおり、多くの貴族が関与していた。

一方、この事件は、十三世紀末までは御家人体制が健在で、山間部の小御家人まできちんと上番役を勤めていた事をも示している。

十四世紀になると、長井氏が備後の守護となり、この地方に勢力をもってくるが、元徳二年（一三三〇）長井貞宗が踊喜六郎次郎入道に

「備後国踊喜村内池酒并田所職、神社仏寺以下田畠事、故長井又三郎長貞の宛文の旨に任せて、相違なく知行しなさい」

という御教書をだして所領を与えている。踊喜村で所領を拡大している六郎次郎入道の名前や、頼連との具体的な関係は不明であるが、一族で村を分有していたと思われる。また、この時点で安芸国内部庄の一部も支配していたと考えられる。

すなわち「城清源着到状」に

「備後国泉庄内踊喜村一分地頭兼安芸国内部庄一分地頭太輔房清源、御方に馳せ参りました。向後は軍忠を抽んでおりますので、この旨御披露下さい」

とあるからである。この書状が何年のものかは不明であるが、同じ清源の元弘三年（一三三三）の軍忠状があるので、この二つから判断して村を二分していたことが分かる。

その清源の軍忠状には

「安芸国内部庄一方地頭城大輔房僧清源申し上げます。今月七日合戦之時、竹田河原高倉縄手より、六波羅未申角箭倉之際において、合戦忠勤を抽んでいた条について、土屋美濃房、中鳥次郎左衛門尉等が見知していることは、其の隠れもありません。然者、早かに先祖本領等返給下され、かつ恩賞に預かれば、いよいよ合戦忠節を致すべく存じます。此旨を以って御披露くださるよう、恐れながら申しあげます」

とあり、最初にみた頼連のものと内容はほぼ同一で、ここでも先祖の本領返還を願っている。四十年前には忠実に幕府の大番役を果たしていた御家人が、時勢の動きを敏感に察し、百五十年来の夢を実現する為、一族をあげて動いた。まさに西国外様御家人の執念を示したのである。

この後、延元二年（一三三七）七月十二日に早山立城六郎次郎入道西圓（踊喜六郎次郎入道と同じか）に対して

「親類を率い、安芸国東西条凶徒を退治して、そうそうに参洛すべし。天気如此、悉之」

という後醍醐天皇の綸旨が、新田義貞によって伝達されており、さらに正平六年（一三五一）八月七日には、城又次郎に対し

「御方に参り、軍忠いたすべし。殊功有れば、褒賞せらるべし。常陸親王の令旨此の如し。悉之、以状」

という常陸親王の令旨が右兵衛佐によって伝えられているが、この綸旨と令旨についての結果は不明である。

しかし、こうした数十年にわたる本領回復の夢も南朝の没落とともに潰えさり、名族葉山氏は草深い山村の土豪領主「踊喜氏」としてかろうじて生き残ったが、戦国時代には尼子・毛利のはざまで歴史に苛まれ、ついには埋没していったのである。

第九回郷土史講座

積石塚の謎に迫る

「秋の古墳めぐり」では、高松・善通寺の古墳を探訪しますが、今回の郷土史講座ではその予習を行います。

中でも、石清尾山古墳群は累々と石を積み上げた、いわゆる「積石塚」で、全国的にみても非常に珍しいものです。一般に、積石塚は騎馬民族の墓制として知られています。

果たして石清尾山古墳群を造ったのは騎馬民族だったのか、それとも違うのか……講座では、騎馬民族征服王朝説との関わりも含めて、その謎に迫ります。

＜実施要項＞

日程　十月二八日（土）
時間　午後二時～四時
場所　中央公民館会議室
講師　山口哲晶副会長
費用　一〇〇円程度

明王院本堂と東大寺系工匠

木下　和司

中世の建造物を訪ねてみると古代の建造物にはない暖かみの様なものを感じる事が多い。なぜだろうかと考えてみると、古代の建造物が木工寮（もくりょう）・修理職（すりしき）と言う古代国家官僚の手になっているのに対して、中世の建造物はその造営費用を民衆からの喜捨に仰ぎ、庶民階級である血縁を中心とした工匠集団によって造営されたことにその理由があるように思われる。

現在の明王院も中世の民衆を中心として造営された地方寺院と考えられるが、江戸時代以前には常福寺と呼ばれており、本堂の秘仏十一面観音菩薩は貞観期の造仏であるため、寺院の創建は平安時代前期まで遡ると思われる。本堂の解体修理に際して現本堂の位置に掘立柱の前身堂の存在が確認されており、おそらく草戸千軒の発展にともなって、現在の伽藍が整備されて行ったと思われる。現在の明王院本堂は、内陣蟇股下端及び内陣北大虹梁上端に、

『紀貞経代々二世悉地成就
元應三年三月十四日沙門頼秀』

の墨書が発見されており、一三二一年の建立が明らかであり、中世本堂建築の優品として国宝の指定を受けている。

明王院本堂の建築様式は、一般に折衷様と呼ばれているが、古代寺院の建築様式である和様に、鎌倉時代初頭に伝来した建築様式である大仏様（東大寺の再建に用いられた建築様式）及び禅宗様（禅宗寺院の建立に用いられた建築様式）を部分的に取り入れたものである。この本堂は三つの建築様式の折衷がかなり進んだものであり、施工上及び建築意匠上に新しい工夫が認められる。例えば、日本の寺院建築は一般に建物の安定感をだすため、水平線を強調した横長のプロポーションを取るが、この本堂では垂直線を強調した縦長のプロポーションが試みられており、従来の日本建築にはみられない印象を鑑賞者に与えている。

また、中世の本堂建築を鑑賞する上での醍醐味は、その建築意匠と内部空間の構成にあるが、この本堂の内部空間、特に輪垂木天井を用いたトンネル状の斬新な外陣空間及び大仏様・禅宗様の装飾細部を多用した外陣意匠には見るべきものが多い。

次に明王院本堂を造営した工匠について考えてみたい。中世の折衷様式は、主に瀬戸内海沿岸部を中心に発展した。これは、東大寺再建の最高責任者であり、大仏様の創始者でもある東大寺初代大勧進職・俊乗坊重源が勧進の拠点として、また、彼の宗旨であった念仏の道場として開いた七箇所の別所のうち、三箇所が播磨・備中・周防にあり、ここに大仏様の建築が建てられたためであろう。この関係から瀬戸内海沿岸には早くから東大寺系工匠が進出していたと考えられる。なお、播磨別所は播磨浄土寺として現存しており、その浄土堂は東大寺南大門と並ぶ大仏様の代表建築である。

また、備後浄土寺金堂は一三〇六年の建立であるが、『浄土寺文書』によれば、この時大工を勤めたのは東大寺大工八重宗遠であり、東大寺系工匠の瀬戸内沿岸進出が裏付けられる。金堂の建立には大和西大寺の僧・定証が深く係っており、金堂上棟以降、浄土寺は西大寺系の律院となっている。この関係から大和番匠である東大寺系工匠が大工を勤めた可能性が高い。残念ながら、金堂は一三二五年に焼失し、一三二七年に現存の本堂として再建されている。本堂再建時の大工は、棟札によれば藤原友国であり、この人物も東大寺系工匠である可能性が強い。明王院の前身である常福寺も浄土寺と同じく鎌倉時代末には西大寺系の律院であり、本堂建立に東大寺系工匠が関係した可能性が強いと思われる。

また、明王院本堂の空間構成・建築意匠等を見ると、地方の工匠だけではこれほどの建造物が造りえたとは思われず、浄土寺と同じく中央の工匠が関与していることは、まず間違いはない。十四世紀初頭に中央で高い技術を有した工匠集団は、奈良の東大寺及び興福寺の二つに存在した。この内、興福寺系工匠は本堂建築に関して、正面扉に住宅風の蔀戸を用いる奈良・霊山寺本堂や香川・本山寺本堂のような建築を好み、桟唐戸を用いる奈良・長弓寺本堂や備後浄土寺本堂のような建築を好まない。この点からも明王院本堂に東大寺系工匠が関与している可能性が強いと考えられる。特に、この本堂では外陣入側隅・海老虹梁の用い方にみられるように、禅宗様の扱いが非常に巧みであるから、おそらく東大寺系工匠の内で、京都五山の一つである東福寺の創建に参画し、禅宗様の技術を学んだ一派が関係しているのではないかと考えたくなるが、資料的に裏付けられるものはない。

※東福寺仏殿大工物部為国は、東大寺再建時の東大寺大工物部為里の直系と考えられる。

遅報　秋の古墳巡り下見レポート

～讃岐はうどんのメッカ、でもやっぱり焼きそばを食いてーな～の巻

山口哲晶

八月二〇日朝、半分閉じた眼で身支度をして颯爽と半分よろけながらミニバイクに乗った。夏の朝は涼しい、気持ちがいい、壮快な気分だなと夢うつつに我が家を出る。今日は秋の古墳巡りの下見の日、古墳の下見と言えば、ウム、こやつらしかいない。〃トイレ心配七森〃氏、〃若いきれいな声に弱い競輪平田〃氏、〃しずしず網本〃氏、そして私、〃鬱病山口〃である。今日もまた、あの悪夢のような一日が始まろうとしている。相変わらず寝ぼけ眼で駐輪場にバイクを置き、時計を見る。なに！集合時間五分前！奇跡の近いこの早さ！へへへ、どうだ、どうだ、どうだ！今日こそはみんなを驚かしてやるぞと集合場所に急ぐ。ところが、行ってみると誰もいない。せっかく早く来たのに…泣いちゃうから。そのうち平田氏が何やら怪しげな袋を抱えて前屈みで歩いてくる。向こうではこれまたメガネをかけた三〇前半男が体を横に振りながらゆっくりとこちらを目指している。二人とも何処からともなく湧いてきたような登場の仕方である。平田氏は着くなり、怪しげな袋からおもむろに何やらゴソゴソと取り出した。中身は今日の観光案内図とパンフレット。さすが〃用意周到、徹頭徹尾平田〃氏。思えば今の会の行事は平田氏のこの性格の上に成り立っているとも言えるのだ。三人が揃った。あと残るは網本氏、「夕べも勉強のやり過ぎで目が覚めないんじゃないの」とか、「いやあの人は朝弱い症候群なのだ」「いや、奥さんに行って来るヨ、なんて鼻の下を伸ばしているんだよキット」など無責任な会話が弾んでいる中、真っ赤な高級車が横付けされ、中には短パン姿の網本氏が〃どうもどうも〃とハンドルを握っていた。ようやく揃った『不動の下見軍団』に今回は小学校五年生の小林君が加わり総勢五人の大軍団となった。小林君は、平田氏の同窓生の子どもだということである。何によって手なずけたのかは知らないが、やたらと彼の周りには子供が寄りついているのだ。全員揃ったところで小林少年の両親に見送られて出発。〃トイレ心配七森〃氏は今日のルートでは出番がない。そこで〃地図マニア七森〃として活躍している。おもむろに地図を広げて

「はい、そこを右です」

「はい」、

「あと一〇〇mで交差点を左折です」

「はい」

七森氏のナビに網本氏は素直に従う。車は順調に山陽道を一路本四架橋に向かう。小林少年はまだ四国には行ったことがないそうだ。「ほら見てご覧、これが瀬戸大橋だぞ、でかいだろう。」

「うん。」

素直でおとなしい子だ。与島で休憩を取る。私は日傘の下に座りスプライトを飲んでいると、七森氏も何やら冷たい物を手に持って隣に座った。小林少年も椅子に座って陽をよけている。そこへ平田氏がソフトクリームを持って現れ、小林少年に手渡した。「はい、食べな」。ウーム、平田氏はこの方法で幼気な子供を誘惑して手なずけていたのか、挙げ句、強引に塾に入れているに違いない。出発の時の両親の心配そうなあの眼差しの謎がようやく解けたのだった。網本氏が土産物店の徘徊から帰ってきたのでいざ出発。

「ここを右に回って下さい」

「はい」

再び橋に戻って四国の人となる。

「でっかい船があるゾ、見てご覧」小林少年は身を乗り上げて辺りを見ている。それにしても小学校五年生で古墳に興味があるとは、なかなか、こりゃあ網本二世になるかもしれない。これからは〃小網本君〃と呼ぶことにしようかな。でも、こんなニックネームは厭がるだろうから止めておこう。

さて、今回の古墳巡りの目玉は、「積石塚」である。この積石塚の集中している「石清尾山古墳群」が最初の下見。高速道路から降りると地図をしっかりと握った七森氏の、地図とのにらみっこが始まった。おかげで車は目的地に近づいていく。現地に着くと、早速下見の開始。看板に従って山に分け入っていくとある石の山が。思っていたより大きめのゴツゴツした石で墳丘を築いている。初めて見る積石塚、石の感触を確かめるようにゆっくりと歩いてみる。〃花粉症平田〃氏と〃道探し七森〃氏はとっくに先に進み、ルートを探している。網本氏は例の如くに、しずしずと徘徊されている。この網本氏、毎回意外な一面を見せてくれる。去年もそうだったが今年は何と言ってもTV出演事件である。それはこんな風にして始まった。

さる日曜日の朝、何気なく某TS

Sの中国地方を巡るクイズ番組があるのだが、なんとそこに見た顔が映っている。はしゃぐ網本氏を見たときは目が点になってしまった。決勝まで進み、顔がアップになる。「問題！、ジャジャン」。網本氏がボタンを押した！「柳川なべ！」鈴を振るような声で答えた！「正解！」結局一ポイント差で涙をのんだのだが、はしゃぐ網本氏を一緒に見ていた我妻はただ呆然として、「網本さんでもはしゃぐのネエ…」と口をパクパクさせていた。エンディングで手を挙げ飛び跳ねる姿を見てから、口の悪い我が家では早速「飛びはね網チャン」とニックネームが付いてしまった。その網本氏が目の前を徘徊している。突然、「それでは、野外講座でも開きましょう」と言った。

小林君に向かって

「今までに古墳を見たことはあるかな？」

「神辺の迫山古墳を見た」

「うん、あの古墳とこの古墳は何処が違う？迫山は土で墳丘を造っているけれども、この古墳は違うねえ。石を積んで造っているところが違うね。こんな古墳を積石塚って言うんだよ。」

優しい網本氏の姿がそこにはあった。

下見を終え、ルートも決まってそろそろ昼食の時間。「次の善通寺市までの道沿いにきっとあるでしょう」この言葉をみんな信じきって善通寺市に向かった。「山口さん、焼そばがいいんでしょう？探しますからね」やさしい平田氏の言葉に目がウルウル。だが、だが行けども進めどもない、ない！焼そばどころかファミリーレストランさえないのだ。「いや、きっと在りますよ」「在ると思いますよ」「在るんじゃないかな…」

結局善通寺市に着いてしまったが、ない。町中をグルグルと探してもない。みんな空腹のピーク、苛立って来た。その内「わざとない道ばかり走ってんじゃないの？」とイヤミまで出る始末。「こっちに行けばきっと在るよ」「ホラホラ、ホラ在りそうな雰囲気でしょう？　ホラ在った！」やっとの事で見つけたファミリーレストラン。やや薄汚い感はするが、空腹には勝てないと言う原始の真性をもろにさらけ出した軍団であった。店に入るといっぱいの人。

「やっぱりここらはファミリーレストランが無いんだよ、見てよいっぱいじゃん」。注文を終え、しばらく待つと来た来たメシ。一斉に皆の動きが早くなった。一言も喋らず、下を向いて唯モクモクと食っている。そんな下品な大人達の中で上品に食べていたのは小林君一人であった。

店を出ると、何と目の前一〇mほど先に〝焼そば〟と大きく染め抜いた暖簾がヒラヒラと風に揺られているではないか。

「人生って皮肉だよナ」

「旅先ではこんなもんだよ」

「……」

何の慰めにもなっていないのは勿論である。

その後、郷土資料館、きれいに整備された王墓山古墳、整備中の宮が尾古墳を見て下見を終えた。帰り道、与島に寄って帰福の途についた。

途中、本四架橋の料金所まで来ると、何と、うら若い女性が窓口に立っているではないか。順番待ちをしていると、目敏く彼女を見つけた平田氏が突然大声で「〇〇〇さん！」と声を発した。みんなが驚くと「だって、名前の書いたプレートが貼ってあるでしょう」。〝用意周到、徹頭徹尾〟の平田氏のこと、あらゆる方法でもって必ず、住所と電話番号を調べ上げて電話するに違いないのだ。何せ、北房町の教育委員会の〝声のきれいな女性〟にシンポジウムのパンフレットを貰いに行くと言って顔を確かめにいったくらいである。こうして悪夢のような下見は終わったが小林君、こんな卑猥で下品な中年おじさん達でも良かったらまた古墳巡りに行こうね。

今は秋、この日のことを思い出していると、風に揺れるコスモスの花の向こうに、あの日のみんなの顔が浮かんでくる。

古墳講座Ⅱ

第一一回古墳講座Ⅱは「石棺・木棺について」と題して、古墳に使われた棺を中心に学習します。

〈実施要項〉

日程　一一月四日（土）

時間　午後二時から

★これから夜間は寒くなってきますので、しばらくの間、実施時間を昼間に変更します。ご注意下さい。

場所　中央公民館会議室

講師　山口哲晶氏、網本善光氏

『古事記』を読む

〈実施要項〉

日程　一〇月二一日（土）

　　一一月一一日（土）

★一〇月の第二土曜は一泊旅行と重なるため第三土曜に変更します。御注意ください。一一月はまた元に戻ります。

時間　午後二時から

場所　中央公民館会議室

講師　神谷和孝氏、平田恵彦氏

中世の代表的大荘園

大田荘の実力者・淵信の思考

柿本光明

歌の心を求めて、蜜の蜂が花房に慕い寄る。幻のように、春の盛りを物語る桜の姿は消えてゆく。まだ初夏の時にはわずかばかり間のある頃今高野山の塔の岡の展望台にたたずむと、かつて平安時代から室町時代まで大田荘とよばれた大きな荘園が眼下にひろがる。

平清盛の全盛時代、名目上は後白河上皇の荘園、実質的には平家領としてつくられ、平家滅亡後は高野山の荘園となり、やがて源頼朝の重臣三善康信が地頭に任命された。

大田荘の東半分は桑原郷（桑原方）西半分は大田郷（大田方）とよばれ、その境はほぼ現在の甲山町と世羅町の境に一致する。

花の時は緑の時にかわって、それでもどこかに、まだ美しい幻の花が咲いているのではないかと、そんな風に思われる。

広い水田のひろがる盆地と、周囲の山々、その間に枝分かれてゆく小さな谷々という大田荘の景観を、まずしっかりと心の中におさめておきたい。かつて今高野山に大田荘支配のための荘政所が置かれたのも、まことに当然だと思う。

大田荘と港町・尾道の関係が深いのも、平安末期、大田荘の年貢米積み出しのため倉庫の敷地（いわゆる倉敷）として尾道村の五町の田畠が荘園のものと認められたからである。鎌倉初期以来、大田荘とともに尾道村も高野山領となり、鎌倉末には浄土寺をはじめ、いくつもの寺院と一千軒以上の民家を有する港町として繁栄した。大田荘と尾道の港は密接不可分な関係であった。

高野橋のあたりに喚声が上がる。物見の群衆の姿が揺れると行列のためにあけられる路に、一時人が走り出る。淵信は日頃、大田荘と尾道港との往復には輿五、六挺を用い、女騎（馬に乗った女性）数十騎と家子郎党百余騎を従え、さらに前後には護衛二、三百人を連れて、一国の守護とて及びもつかぬ勢い。淵信を乗せた行列が今日も尾道の港町に向って行く。このことは、鎌倉後期蒙古襲来、弘安の役一二八一（弘安四）年前から十数年間にわたって大田荘の預所（荘官）として活躍した淵信の行状である。

鎌倉初期以来、荘を管理する預所には高野山の寺僧が任命されるのが原則であった。淵信も阿闍利、和泉法眼と称する僧侶である。

砂埃が舞い、人の喚声がそのまま風となって、どこからか葵の若葉を運んでくる。

進む人の列、見送る人の波。飾り立てた輿が進み、馬がいななく。

左衛門尉範方とは淵信の子どもというから、淵信自身もさる豪族武士の一族の出身で、ふだんは地方武士団の首領格として行動していた人物にちがいない。

また反対派（大田方）の訴えによれば、淵信は高利貸や商業活動にも手を出し、数百貫文の資金をもって大田荘の東隣りの河尻社をはじめ伊予国新居荘（新居浜市）・長門国位佐荘（美祢市）や出雲国の荘園など四か荘の支配を請け負い、尾道港の船主や梶取あるいは大田荘内の夏姓らをこれらの荘園支配者の使者に取り立てたという。これら反対派（大田方）の言分に対し淵信はそれぞれ事実無根と弁明しているが、そうでないようでもある。

しかし、淵信は、大田荘地頭三善氏との争いごとに際し、桑原方預所としてあらわれ、自ら鎌倉に参上して地頭の非法を訴え、従横の活躍の結果一二八四（弘安七）年に全五十三か条の長大な判決により高野山の勝訴を勝ち取った。幕府の法律専門家である三善氏の一族を相手取って幕府裁判所で勝訴することは大変な力量の持ち主といえよう。

前に述べた内容は、反対派（大田方）の訴えとしてのもので、後に淵信が桑原方だけでなく、大田方の預所を兼任した時も、大田方の荘官百姓たちが、これを排撃するために記したもので、彼らは淵信が大田荘の年貢四百余石を横領、着服したものとも主張している。

どこまで事実だったかは不明だが淵信が「財宝は倉に満ち、栄華身に余る」といわれる富豪であったことは確かであろう。かれはまさに備後国内だけでなく、ひろく諸国にも手をのばした豪族武士の一員で、高利貸や商業活動にも秀でたやり手であり鎌倉後期の高野山はこうした人物を登用しなければ、とても大田荘支配を続けることが出来ない状況に追いこまれていたようである。

暑い朝である。日は高く上り、雲は一片もなく緑の葉陰を貫く日の光に追い立てられるように、蝉があちこちで鳴き始めた。

尾道を代表する古刹浄土寺に伝わる古文書によると、大和の西大寺で

律宗の興隆につとめた定証は布教のため尾道に来港するや、尾道の有力者たちがこれに帰依し、信者の積極的協力により一三〇六（徳治元）年荒廃していた浄土寺を西大寺流律宗の寺院として再興し、盛大な開堂供養を行なった。

その事情を起請文として残している。この起請文の最後に三十一名の僧侶ら同志の名前が列記されている。この「結縁衆」の最初に淵信、次に淵信の子、範方・頼能の名もある。

『浄土寺文書』によると、この開堂供養の時、淵信はかつて幕府裁判所での勝訴の恩賞として、高野山から与えられていた浄土寺と曼荼羅堂（今は浄土寺の東に隣接する海竜寺）の別当職、さらに付属する山地と浜在家などを定証に寄進している。まさに淵信は戒律をかたく守り、貧民救済の社会事業につくすとともに、流通や交易のかかわりが深く、この時期、全国的に発展をとげた律宗の後援者でもあったのである。これは淵信の今一つの顔であるといってもよかろう。いや、交通や流通との関係の深さからいえば、実際の顔といってもいいのではなかろうか。

ところで淵信の出身地はどこであろうか。久代了信・定淵の二人については法名しかわからないが、この二人より時期的に少し前に活躍した淵信の法名と一字ずつ共通しており、この三人はなにか深い関係がありそうだ。一説には淵信は備後の豪族久代氏（宮氏の同族）の出身であろうと推測されている。

今高野山の塔の岡は、久代了信がここに多宝塔を建立した跡と伝えられている。幸いにも尾道の浄土寺にも多宝塔が建立されており、了信が仏前にその趣旨を述べた願文がある。その末尾で了信は、この多宝塔建立によって「国治まり民は平和に、仏法興隆すれば淵信・頼能らの魂もさぞかし喜こぶであろう」と記している。これによって淵信と了信の深いつながりは明らかであり　一般的にいえば同一家族で親子ではないかと推測される。

前に述べた『浄土寺文書』の定証の起請文の末尾に記された「結縁衆」の最初の三人は淵信・範方・頼能である。頼能については今のところ不明だが、おそらく同じ一族関係者であろう。了信の多宝塔願文に淵信・頼能と並べ、三番目に範方の名のないのは何故であろう。範方が淵信の子であることは明らかである。とするとあるいは了信は範方の法名ではなかろうか。すでに淵信の預所在任中範方は「小預所」と称して預所の任務の一部を代行して淵信の後を継ぐにも好適であったろう。久代了信＝範方とすれば謎はとけるのである。

今高野山や浄土寺に残っている古文書に淵信や了信らの自筆花押がある。一族や親族の花押は類似することが多いので、花押の比較も一つの方法である。

淵信の花押（左）と了信の花押
いずれも浄土寺に残っている文書に記された花押。

二人の花押を比べてみると、何となく似た点があるように思える。淵信と了信が親子であるという一つの根拠と考えられるが、どうだろうか。

淵信を備後一宮吉備津宮の神主宮氏の一族としてみると理解しやすくなることがさらにいくつかある。

淵信が反対派（大田方）によって四か荘の請け負いをしていると告発された中の一つに、大田荘に隣接している河尻社がある。これについて淵信は請け負ってはいないが、わけあって息子の範方が一つの名の支配をしているとの弁明をしている。河尻社の一部を支配していることは認めたわけだが、実は、河尻社には中世に一宮吉備津宮の分社が祀られていた。また久代氏の本拠地、奴可郡久代には久代一宮として一宮吉備津宮の古い分社があった。そして尾道の浄土寺が西大寺末寺として再興された供養に際しては吉備津宮の楽人たちが参加して結縁のために舞楽を奏しているだけでなく、一宮の別当寺が中世には浄土寺だったとされている。これらはいずれも、吉備津宮と淵信との間の何らかのつながりを物語るもので、淵信が備後最大の吉備津宮の神官宮氏の一族であったとすれば一連の話の筋がよくわかる。

さて、今高野山の塔の岡には久代了信の建立した多宝塔は跡形もない。しかし、高さ二・三メートルに及ぶ見事な五輪塔が立っている。

遠き昔に、この地に立って北を望めば遠く山々に囲まれた壮大な大田の荘園がひろがり、また浄土寺奥の院から尾道水道を望むと右側に尾道の町並みが、そして水道をはさんで向島・因島と一条の尾道水道は良き港である。当時淵信はこの光景を眺めながら何を思考したであろうか。

立石先生の在りし日

桜井　須磨子

福山の歴史に興味を持ち始めて一年くらいして、田口会長から立石先生を紹介して頂きました。

その頃立石先生は、宇喜多一族に関して調べものをしておられ、私は宇喜多という名前しか知らないままに、車に同乗して岡山、邑久と連れて行って頂きました。

物静かで、無表情、最小限のことばしか話されない方だと思いました。ただ二人の会話から、中世の山城、また、合戦の様子を想像しながら、行く先々が珍しく、今は良い想い出です。

如月の千町平野を見渡せば
　田面微妙に青む場所あり

喜之助のからくり人形「雪ん子」
　は糸に釣られてほほへむ如し

首塚に合戦の謂れ書きあり
　新興住宅の道のかたわら

道の無い笹原の中、車の行かない細い山道へと、先生はどこにでも足を運ばれました。

歴史という既に無い世界の探求にあっては、食欲とも言うべきあくなき追求を続けられ、文字や数字、地形などで総合的な判断を下されました。また、地元の方の話、方言などから史実を確認する作業をされた上で、資料をあらゆる所から取り寄せ、正否を決められ、立石先生流の見識を打ち立てられるお姿に敬服致しました。

備陽史探訪の会の良い所は、その研究の成果を発表する場所があることです。

先生は中央公民館で情熱的に講演されました。終了後の質問に対しても丁寧に説明され、皆さんの納得を得てゆかれる場面が目に浮かんできます。

足の悪い先生でしたので、時には私の肩に手を置いて歩かれたことも懐かしく思い出されます。

私の上司になられ丸七年、時に社内で会えば、目を細めて微笑んで下さった先生です。すごくきつい性格だったと多くの方は言われますが、私はすばらしい洞察力を備えられた人格者であったと思います。

半年程入院、その病状を漏れ伺うとき胸が痛みました。政治をやめられた時から全く政治を口にされない歴史一筋の晩年でした。

徒歩例会

古代深津市の謎に迫る

―蔵王ミステリーツアー―

十二月は忘年会と徒歩例会の月と決まっていますが、今年は『万葉集』で「深津島山」と歌われた、古代福山の中心地、蔵王町を探訪します。

深津の名はいうまでもなく、以前この地が湊であったことを示しています。今では想像だにできませんが、水野勝成が高島から船で深津に向かい、そこから神辺まで歩いたという記録があるように、江戸初期までは立派な湊でした。近世以前の福山は、深津を始めとして奈良津、吉津、草出（草津＝草戸）、津之郷といった内海の湊に分かれていたのです。

また、この周辺はかつて「市村」と呼ばれていました。地元の年配の方は、今でもこの名称に愛着を持っていらっしゃるようです。

市村の地名は、かつてこのあたりで市が立っていたことを示しています。事実、『日本霊異記』にも、盗んだ馬を深津市で売ったという話が出てきます。

幻の古代・中世都市「深津」…過ぎ去った栄光の日々を取り戻す旅にあなたもご一緒なさいませんか。

☆主な探訪予定地

①**宮の前廃寺**　国史跡。伝海蔵寺跡。奈良時代の古代瓦が出土。

②**弥陀八幡**　宮の前廃寺のある神社。海蔵寺の鎮守であったらしい。

③**千塚**　弥生時代の住居址。

④**長池**　別名、孝霊池。孝霊天皇の御座所があったとの伝承がある。

⑤**蔵王山下城城主（小川大膳）の墓**　足利尊氏直筆の古文書を所蔵。

⑥**仁伍貝塚**　縄文時代後期の貝塚。

⑦**医王寺**　県の重文の弘法大師像や

⑧**惣戸神社**　大山祇神を祀る。かつては船神、その後は農業神に。

＜実　施　要　項＞

日程　一二月三日（日／小雨決行）

集合時刻　午前八時三〇分

集合場所　福山駅南口「釣人の像」

『中国バス』に乗車「広尾」下車。

バス料金（交通費は各自負担）

大人二一〇円、小人一一〇円

★現地に近い方は「蔵王農協」前に午前九時一五分に集合。

講師　田口義之氏、柿本光明氏

参加費　五〇〇円（保険・資料代等）

申込方法　ハガキ・電話で事務局へ。

定員はありませんが、資料印刷の関係上、必ず申し込んで下さい。

受付開始　一〇月一六日（月）

その他　弁当・飲み物持参。

必ず運動靴で参加のこと。

事務局日誌

七月五日（水）みどり書店へ『山城探訪』を三〇部納品。

七月九日（日）山口、平田両氏が掛迫六号古墳地権者、田口寿氏に挨拶に伺う。測量の快諾を得る。

七月一一日（火）山口、平田両氏が掛迫六号古墳地権者、草浦達人氏に挨拶に伺う。測量の快諾を得る。

七月十五日（土）広島県立歴史博物館へ『山城探訪』を一〇部、サントーク廣文館へ二〇部持参し納品。

七月二五日（火）そごうブックセンター廣文館へ『山城探訪』を二〇部納品。

七月三一日（月）サントーク廣文館へ『山城探訪』を二〇部納品。

八月五日（土）掛迫六号古墳測量調査説明会Ⅰ。山口、網本両氏が講師。「下草刈りの際、もし埴輪が発見すれば、大変です。年代が確定でき、発見者の名前が残りますよ」との説明に、ヨーシとみんな盛り上がる。参加は三七名。

八月六日（日）午前中、測量調査の下草刈りの範囲の下見。当初の予定より広範囲の伐採が必要だと判明した。参加は篠原、山口、平田各氏。新たな調査範囲の地権者、草浦久人氏にとりあえず挨拶。

★午後からは夏季シンポジウム「暴れん坊将軍の実像に迫る」開催。パネラーは田口、後藤、出内、小林の各氏。司会は神谷名誉会長。参加者は意外に少なく一六名。

★児島書店へ『山城探訪』を二〇部持参し納品。同時に以前納品した二〇部の代金二四〇〇〇円を集金。

八月九日（水）宮脇書店へ『山城探訪』を一〇部納品。

八月一二日（土）会報六六号発送作業。参加会長以下事務局四名。

八月一九日（土）『備後古城記』を読む。参加一五名。さすがに常連は休まないで来ています。

八月二六日（土）『古城記』を読む。参加二九名。暑い最中ご参加下さったことに深く感謝。

九月二日（土）古墳講座Ⅱ「古墳に納められたものⅠ」講師は網本氏。参加八名。夏の疲れなのだろうか。

九月三日（日）山口、平田両氏が掛迫六号古墳地権者、草浦久人氏に挨拶に伺う。測量の快諾を得る。

九月五日（火）そごうブックセンター廣文館へ『山城探訪』を二〇部持参し納品。

九月六日（水）測量講演会・説明会会場の法成寺公民館へ会場申し込みに。町内会長（二名）に協力を要請したら、回覧板で配布下さるとのこと。

★赤坂公民館へ『山城探訪』を六部持参し納品。

九月七日（木）みどり書店へ『山城探訪』を二〇部納品。同時に以前納入した五〇部の代金六〇〇〇〇円を集金。

★ブックセンターあおい甲山店へ五部郵送で納品。

九月八日（金）法成寺町内会回覧用案内を七五〇部を印刷し、公民館に持参。桑原氏を訪ねて地元の方を結集をお願いする。

九月九日（土）『古事記』を読む。参加二七名。講師は柿本氏。『古事記』に描かれた淡路島と伊邪那岐神の関係を中心に、名調子を披露。何度でも登場して下さいね。

九月九日（土）～一〇日（日）末森氏とともに佐藤錦氏、平田氏が一泊旅行の下見遠征。小谷城、一乗谷遺跡はやっぱりスゴイ。当日の晴天をひたすら祈る。

九月一一日（月）廣文館サントーク店から『山城探訪』四三部の代金五一六〇〇円領収（小切手）。

★そごうブックセンター廣文館から『山城探訪』四〇部代金四八〇〇〇円を集金。

九月一六日（土）『備後古城記』を読む。参加一六名。出内氏、坂本氏が担当。詳しい資料に大満足。

★終了後、例会資料作成と行事案内発送作業にご協力いただいた。

九月一七日（日）「木之庄・本庄の史跡巡り」講師は中村氏、出内氏、蒲田氏。飛び入り参加が多く、資料が不足する。参加八五名くらい。今後、参加の場合は必ず連絡を！滔光寺では秘仏を拝観、感激する。

★毎日新聞が掛迫六号古墳の発掘調査を大きく報道。

九月二〇日（水）広島県立歴史博物館へ『山城探訪』を二〇部納品。

★中国新聞が掛迫六号古墳の発掘調査を大々的に報道。

九月二一日（水）春日辰文館から『山城探訪』二〇部代金二四〇〇〇円を領収（小切手）。

九月二四日（日）掛迫六号古墳講演会説明会Ⅱ開催。参加六五名（会員三六名、一般二九名）。読売新聞・中国新聞が取材に。終了後、現地見学を実施。篠原氏が熱弁をふるう。測量も大成功させよう。

九月二六日（日）読売新聞と中国新聞が掛迫六号古墳講演会説明会の記事を掲載。

九月三〇日（土）第八回郷土史講座『深津市の謎に迫る』を午後一時半から。参加三七名。講師柿本氏。

★夜から、役員会。参加九名。

承応事件と明王院

小林　定市

徳川家康が天下人となり江戸幕府を創業し、二代を相続した秀忠は後継者として幕府の安泰を計り、三代家光は老中若年寄制度を整えて幕府の集権体制をほぼ完成させ、大目付の設置をみ、寺社奉行・町奉行・勘定奉行を整え幕府執行部を成立させて、ゆるぎない幕府体制を確立した。

家光が慶安四年（一六五一）四月二十日に、四八才で病没すると継子家綱は十一才の若君であった。

関ヶ原合戦後、徳川三代の間に改易された大名家は一三一家にのぼり、その没収総高は一二一五万石に達していた。

大名が取潰されると浪人が大量に発生し、浪人は仕官の途を求めて江戸・京都・大坂に集まるが、再任官の道は閉ざされ、生活に窮した浪人達の不満は爆発寸前のところまで膨らんでいた。

幼少の家綱が将軍の座に就くと、そこに将軍独裁政治の空白が生じた。この機会に乗じて、由井正雪・丸橋忠弥を首領とする浪人達の徳川幕府を転覆しようとした陰謀事件（慶安事件）が同年七月二四日に発覚した。

この政局の極めて不安な状況のなか、翌年続いて発生したのが承応事件である。承応元年（一六五二）九月十三日に露顕し未発に終ったこの事件の主謀者は、越前大野松平但馬守直富を古主として江戸の芝札の辻に住む、別木（戸次）庄左衛門・土岐与左衛門・三宅平六・藤江又十郎・林戸右衛門らであった。

叛乱計画の内容は、九月五日より芝増上寺で行なわれている徳川秀忠夫人崇源院の二七回忌の法会が十五日に終るのを待って、風の烈しい夜増上寺の周辺数ヶ所に火を放ち、寺に乱入して財宝や香奠の金銀を奪い取る。その際、火消の指揮をとるため出動する老中を待伏し、鉄砲又は遠矢で打落すと府内は大騒動となるから、その虚に乗じて天下の変を窺わんとするものであった。

取調べが進むと浪人以外にも、普譜奉行城半左衛門朝茂の家中長島刑部左衛門（長島は幕府が放ったスパイだった）、老中阿部豊後守忠秋の臣山本兵部（二百石）、福山水野美作守勝俊の家中で、兵学者石橋源右衛門（三百石）も関与していたことが判明する。

別木らは、最所の取調べで、石橋が謀叛の張本人であると名指していたことから、十九日評定所において尋問があり、別木らは、石橋に挙兵の方法を尋ねた後、陰謀を打ち明け二百余名の連判状を示して石橋の判形を求めた。石橋は驚き次の返答をした。

「今御静謐の御代を乱さんとは、須弥山に長競べ、石を抱いて渕に入るに等し、先年由井正雪無道の徒党を企だて忽に誅せられ、骸の上に恥を曝す、前車の覆るは後車の戒めなるべし」と応じなかった。

その後別木は石橋の宅を三度も訪問するが、何れも留守と称して対面を回避した。

しかし、別木らの謀反を聞きおき乍、主人美作守勝俊に押し隠し報告しなかったことを咎められ、判決は主謀者と同罪と決まり、取調べから二日後の二一日に断罪が下され、石橋源右衛門を含め六人の主謀者は浅草において磔刑、石橋源右衛門の弟又次郎（十五才）と、子息の兵部左衛門（五才）も同日浅草において斬罪となった。

史料の上からは、承応事件は石橋の処刑で終ったように見えるが、実は承応事件をきっかけとして、領主勝俊の苦心は始まる。当時幕府は権力強化を計り、大名の廃絶を推進していた。幕府転覆に加担した家臣を出した大名家は譜代と雖も法律的理由により何時でも取潰される状況にあった。

取潰しを避けるため、勝俊は早急に徳川家に対して恭順の意を表わす必要に迫られた。

最も効果があると考えられたのは、大猷院（徳川家光）を鄭重に祀ることであった。先代からの方法で徳川家光を祀るのであれば、浄土宗定福寺に秀忠に続いて家光も祀れば済まされたが簡略であり過ぎた。

当時水野家の財政状況は、寛永十二年（一六三五）八月、幕府から金銀併せて約一八三〇〇両の拝借金があり、約一一七四〇両は返還していたが未返済金が約六五六〇両残っていた。寛永中期頃の飢饉・島原合戦の軍費・寛永末期から始る新開干拓と出費は嵩み、更に慶安四年三月に水野勝成が没したことで、弔いの費用も算段しなければならず、極度に悪化していた。

承応元年から明暦元年にかけて財政は逼迫し、知行物成を切り下げてしのいでいる。この困難な時、新たに寺社の造営となると莫大な費用の捻出を必要としたことから、苦心の末案出されたのが奈良屋町の明王院と草戸村の常福寺を合併させて、領内随一の大寺を創出し、先代の徳川将軍を祀ることであった。

当時の明王院は、福山城天守の上棟式を執行した宥将が健在で住職を勤めていた。

水野勝成が隠居し、勝俊が領主となった後も勝成との二元政治を行ってきたのであるが、勝成の死を機会に宥将を退院させて、明王院を草土村に移建させたようで、移建工事を推進した勝俊も、勝成の死後四年足らずの明暦元年（一六五五）二月二一日江戸参府中に死去してしまった。

残念なことに、現在の明王院には寺伝を飾る創作伝承や、史料の厳正な真偽判定を受けていない疑問の多い史料が混在していても、全ての史料は本物として取扱かわれているが、極言すると明王院の史料には偽作と推定される史料がある。

明王院には領主水野家との古くからの関係を示す建物として、庫裡と書院があって、庫裡と書院は水野勝成が元和七年（一六二一）に移建したと伝えられ、本堂（観音堂）も山崩れで元和七年に再建したことを示す二枚の大棟札には、大同二年の棟札が写され、寛永十四年（一六三七）十一月には、定福寺（現在の明王院）の僧舜意宛に出した水野勝成の下知状が伝えられている。

下知状の差出者は、「水野日向守勝成花押」と書いてある。しかし、勝成が水野日向守勝成と書く時は特別の場合のみであった。

勝成が水野日向守勝成花押と書いて知られている史料は、幕府宛に出した三通と、広島の浅野但馬守宛の一通で、水野日向守勝成花押と認めた時は、目上に差出す時に限定されていた。

勝成程の人が、領内の僧宛に出す時は絶体に書かなかった筈で、目下宛の史料は『小場家文書』や『結城水野家文書』にあるように「勝成花押」と認めている。

次に、慶安四年（一六五一）に福山入りした野々口立圃は『草戸記』に、正面に本堂、国宝五重塔の反対側にあたる位置、則ち現在の庫裡のあたりに「阿弥陀堂として形ばかり残り」と、当時阿弥陀堂が建っていたと、阿弥陀堂が存在していたことを記していることから、庫裡が移建されたのは寺伝と異なり、慶安四年より後のこととなる。

阿弥陀堂は、本堂や五重塔と同時期に建立されたものと推定され、明王院に阿弥陀如来立像・木像・像高一八三cm・鎌倉時代末期の作の仏像があるが同像は、阿弥陀堂の本尊であったものと推定される。

水野家の目付吉田彦兵衛は、「農民は大同の年建などといへり、棟札もあれハ大同年あらず、数百年をへたる堂塔なり」（『水野記』巻十三草土村明王院）と現在知られている以外の棟札が、江戸時代中期迄存在したと記している。

棟札には元和六年四月、「天大雨頻重月古今洪水山岸崩仏閣埋土中既及破壊所」のとき、水野日向守が再興したと銘文に記しているのであるが、もし元和七年に大改修を実施していたとすると、七〇年後の元禄三年（一六九〇）に銀三七貫余を費しての解体大修理を行う必要は全くなかったのである。

前記の事柄から、元和の棟札と水野勝成下知状（『福山市史』上巻・明王院の文化財建造物）は、偽作と推定する。

明王院と常福寺の合併は、徳川家光を祀る目的で、承応元年以後開始され、壊れた阿弥陀堂を整理しその跡に庫裡を移転し、その他の書院や護摩堂等も移して寺観の充実を計ったようである。

改修が終ると、家光が四月（卯月）に没していることから、毎年卯月には盛大な供養の儀式が執り行われ、明王院が支配してきた草戸稲荷社では、今も卯祭が継続して行われている。

参考文献『備後福山藩編年史料』

『芦田川遊学セミナー』

現在受講生募集中！

生涯学習時代を迎え、福山市南部ブロック社会教育センターが産声をあげました。拠点となる事務所は、水呑町竹ケ端運動公園の「福山市水上スポーツセンター」内にあります。

今回、このセンターが『芦田川遊学セミナー』を企画。セミナーは全部で五回あり、田口会長がそのうち二回の講師を担当します。

＜実　施　要　項＞

☆第一回セミナー

日時　一一月九日（木）

一九時三〇分～二一時三〇分

学習テーマ

芦田川今昔物語Part1

「福山の歴史と水の流れ」

☆第三回セミナー

日時　一一月二一日（火）

一九時三〇分～二一時三〇分

学習テーマ

芦田川今昔物語Part2

「芦田川の恵みと私たち」

定員　四〇人

会場　南部ブロック社会教育センター（福山市水上スポーツセンター）

★受講料無料。申し込みは「福山市南部ブロック社会教育センター」まで。☎〇八四九（五六）四六四〇

掛迫六号古墳の測量調査をみんなで成功させよう！

掛迫六号古墳の測量に入る前に難題があります。いうまでもなく、下草刈りと雑木の伐採です。

古墳は長い年月のすえ雑木や雑草で覆われているのがふつうです。もちろん掛迫六号古墳も例外ではなく、松（松枯れしています）や雑草がかなり生えています。しかし、正確な測量調査をするためには、これを伐採し、除去しなければなりません。

今一番心配なのは、伐採を手伝って下さる方がいったいどれほどいらっしゃるか、ということです。少人数では時間がかかってしまい、来年春までに測量を終わらせる事ができない恐れがあります。

以前実施した正福寺裏山古墳の場合、伐採に正味六、七日かかりました。今回はその約四倍の面積を刈り取らなければなりません。それに伐採用具も不足しているので、このままでは日数が相当かかってしまうのではないかと心配しています。

そこで、会員の皆様にお願いがあります。具体的には、

①実際に伐採・除去にご参加いただける方を募集します。

まったくの無報酬です。飲み物くらいはお出しできますが、食事は出ません。それでもかまわないという方だけお願い致します。

文末に示す日程すべてでなくても結構です。一日でも二日でもご協力いただける場合は、参加日と伐採用具（鎌、鉈等）の有無を事務局までご連絡下さい。

②伐採に必要な用具をお貸しいただける方を募集します。

参加はできないが、用具は無償で貸すことができるという方も募集します。特にチェンソー（ただし油性）をお持ちの方はぜひお願い致します。事務局までご一報下さい。

＜年内の下草刈り・木の伐採日程＞

①一〇月二二日（日）
②一〇月二九日（日）
③一一月　五日（日）
④一一月一二日（日）
⑤一一月二六日（日）
⑥一二月一〇日（日）
以上すべて午前一〇時～午後四時
⑦一二月一七日（日）
午後一時～午後四時

★集合場所　福山北養護学校前

日程は一部変更しました。詳しくは事務局までお問い合わせ下さい。

1995年（平成7年）9月26日（火曜日）　山陽新聞

円墳それとも前方後円墳

福山・掛迫六号古墳　説明会に65人

福山市駅家町法成寺掛迫の「掛迫六号古墳」の測量調査を計画している備陽史探訪の会（田口義之会長）は二十四日、会員や地元住民に対して調査方法などの説明会を開いた。前方後円墳か、円墳か説が分かれている同古墳のなぞに迫ろうという試みで、歴史ファンら六十五人が参加した。

掛迫六号古墳は、標高八十㍍。一九五五年、県立府中高校の地歴部員の調査では、全長四十六・五㍍、幅二十七㍍の前方後円墳と結論付けている。二基の竪穴式石室があり、男性の人骨や鹿、勾玉、三角縁神獣鏡も出土している。

しかし、古墳が崩れ、はにわや葺石などもないことから形を特定する決め手がなく、考古学者らの通説では「円墳」となっている。

前方後円墳に埋葬されるのは、地域のトップクラスの権力者だが、円墳の場合は武力はあっても政治的な権力がないこともあるとされ、「被葬者の位置付けが違ってくる」（同会）。このため、地元の協力も得て調査し、決着をつけたいとしている。

調査は、古墳の前後左右に十㍍ずつ余裕をとり七十㍍×五十㍍の範囲で実施。十月二十二日から六回にわたって日曜ごとに下草刈りや樹木の伐採をし、来年から測量をする。業者などに依頼せず、すべて会員や市民らの手で行う。

一般の人の参加も呼びかけており、問い合わせは同会事務局（電0849・53・6157）へ。

古墳を見学する会員ら

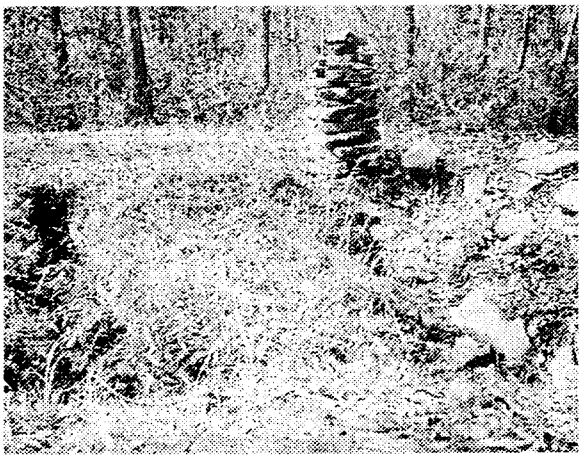
1995年（平成7年）9月17日（日曜日） 毎日新聞

「備陽史探訪の会」が調査へ

40年間 手つかずの掛迫六号古墳

福山市駅家町

40年ぶりに測量調査される
掛迫6号古墳の石室付近



四十年前に調査が行われて以来ほとんど手つかずになっていた福山市駅家町法成寺掛迫の掛迫六号古墳を、備後の歴史ファンの集まり「備陽史探訪の会」（田口義之会長、二百三十人）が詳しく測量調査することになった。六号古墳はこれまで前方後円墳とされてきたが、「円墳では」の意見も出ており、同会では「私たちが結論を出したい」と意気込んでいる。

同六号古墳は、古墳時代中期初めの五世紀初頭ごろに築造された。一九五五年に府中高校地歴部が行った調査では、全長は北東から南西に四十六・五メートル、最高部は高さ七メートル。自然の山を整形し、埴輪や葺石、周溝などはない。最高部付近に二つあるたて穴式石室では、人骨一体分や勾玉などのほか、直径二十一・六センチの仿製（日本製）三角縁神獣鏡なども出ている。府中高校が調べて以来、本格的な調査は行われていない。

前方後円墳か円墳か結論を

当時の畿内権力との関係を示す前方後円墳であるかないかで同六号古墳の歴史的位置付けに大きな違いが出てくるが、他に調査しようという機関もないため、探訪の会が六号古墳の土地所有者の許可を得て行うことにした。会員に埋蔵文化財調査員として働いている専門家がおり、指導を受けた会員らは、会が所有するレベルやトランシットなどで本格的な測量ができる。六年前には同六号古墳に近い正福寺裏山二号古墳を調べ、前方後円墳とされていたが実は備後地区では大変珍しい前方後方墳であることを突き止めるなどの成果を上げている。

探訪の会では、十月二十二日以降、日曜日を利用して古墳に生い茂った下草刈りや木の伐採などを行った後、測量に入る。会では今月二十四日午前九時―十一時に駅家町法成寺公民館で県埋文センターの篠原芳秀係長が「測量調査の意義と実際」の講演を行った後に現地見学を行う。一般参加可で無料。また、調査も一般参加可。問い合わせは探訪の会事務局（0849・53・6157）。

秋の古墳めぐり

積石塚の謎に挑戦する

―積石塚は騎馬民族の遺産か？―

いよいよ「秋の古墳めぐり」の季節になりました。今年は海を渡って高松・善通寺の古墳をめぐります。

高松の石清尾山古墳群は積石塚の宝庫です。積石塚とは石を累々と積み上げて造った古墳で、私たちのもっている古墳のイメージとはかなり違っています。

その積石塚が集中して存在するのは、全国でも高松近辺と長野県だけ。しかも、長野はほとんど古墳時代後期のものですが、この石清尾山古墳群は前期が中心です。

特に最大の規模を誇る双方中円形の猫塚、鏡を出土した鏡塚などは実に見事です。さらに、頭枕をもつ組合せ式石棺にも直にさわることができ、古墳ジャンキーはますます見逃せません。

また、中国大陸や朝鮮半島では、積石塚が騎馬民族の代表的な墓制だということも気になります。彼らがはるばる海を越えて四国までやって来たのでしょうか。まさに謎が謎を呼ぶという感じです。

善通寺の有岡山古墳群では、定番の大型前方後円墳、王墓山古墳の他に、もう一つ注目すべき古墳を探訪します。石室の内部に線刻をもつ宮が尾古墳です。いわゆる装飾古墳ですが、描かれた絵がただ事ではありません。どうやら古墳時代の葬送儀礼を描いたものらしいのです。

どうです？実に魅力的なコースでしょう。今回は大人気が予想されます。申し込みはお早めにどうぞ。

〈実施要項〉

日程　一一月一九日（日）
集合時刻　午前七時四五分
集合場所　福山駅北口（福山キャッスルホテル前）
講師　山口哲晶氏、網本善光氏
参加費　会員　四八〇〇円　一般　五〇〇〇円（瀬戸大橋の通行料が高いのです）
受付開始日　現在受付中。
定員　五三名（残りわずかです）。
その他　雨天決行。弁当・飲み物持参。必ず運動靴で参加のこと。

主な探訪予定地

- **石清尾山古墳群**　謎を秘めた有名な積石塚古墳群。猫塚、鏡塚等。
- **王墓山古墳**　美しく整備された巨大な前方後円墳。
- **宮が尾古墳**　装飾古墳、石室に古代人の葬送儀礼を線刻で描く。
- **善通寺郷土館**　考古資料が充実。

新入会員紹介

前回以後、次の方々が入会されましたのでご紹介します。

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

『備後古城記』を読む

〈実施要項〉

日程　①一〇月二一日（土）　②一一月一八日（土）
時間　午後七時から
場所　①中央公民館会議室　②市民会館会議室
★一一月は会場が変更になります。
座長　出内博都氏

訃報

田口和子さん（たぐちかずこ）

＝田口義之会長の母堂＝

一〇月三日午後三時二七分、福山市民病院で逝去、六三歳。

五日午前一二時より福山市多治米町の自宅で葬儀が行われた。

五年前、病に倒れられてからも、事務局の電話受付をして下さる等、ずっと陰で備陽史探訪の会の活動を支えて下さっていた。物静かで控え目な中にも芯の強さを感じられる方だった。

時雨るや　一すじの光昇り逝く
合掌。

編集後記

☆桜井さんの原稿は編集ミスで前号に載せられなかったものです。この場を借りてお詫びします。また、今回も事情により掲載できなかった方があります。どうかお許し下さい。

☆次回会報は一二月二日発行予定です。原稿締切は一一月一八日。本文「タテ一六字×一二〇～一八〇行」程度で書いて下さい。（磐座亭主人）

備陽史探訪の会事務局　〒七二〇
福山市多治米町五―一九―八
☎〇八四九（五三）六一五七